筑紫女学園大学リポジト

Research on children's Play Environment in Urban Community

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安恒, 万記, YASUTSUNE, Maki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/164

都市における子どもの遊び環境について

安　恒　万　記

Research on children's Play Environment in Urban Community

Maki YASUTSUNE

1．はじめに

子どもにとって「遊び」は，身体的・精神的・社会的な発達上，重要な役割を担っている。しかしながら，子どもの遊び環境は，近年の少子・高齢化をはじめとする社会の急速な変容により，また，家庭や地域における諸問題により急速な変化を遂げている。2002年の中央教育審議会答申では，子どもを取り巻く環境の変化の中で，時間・空間・仲間が減少し，スポーツや外遊びが減少したのに対して，家の中でのテレビゲームなどの一人遊びや，塾・稽古ごとの占める時間の割合が増加したことを指摘している[注1)]。いわゆる遊びの三間（時間・空間・仲間）の減少は，遊びの変化のみに留まらず，子育て環境を更に悪化させ，更に子どもの生活の場である家庭・地域における諸問題を引き起こす，といった悪循環に陥っている。

このような現状において，子どもの遊び環境整備がこれまでの施設整備中心の単なるハード面の整備だけでは困難な状況にあることは否めない。既に小学校においては「子ども放課後・週末活動支援事業[注2)]」が全国で進められ，福岡市においても2004年に「放課後の遊び場づくり事業」がスタートし，2008年現在10校の小学校の運動場で事業化され，それなりの効果を上げている。[注3)]しかしながら，幼児期の子どもたちにとっての遊びの拠点は小学校の運動場のようなある程度外部から守られた空間ではなく，公園など公に開放された空間とならざるを得ない。加えて，この時期の子どもたちにとって遊びは生活の中心であり，その遊びを通して身体的発達はもちろん，親からの自立の一歩を踏み出し，行動圏の広がりによってテリトリーを広げ，社会性を育んでいくことを考えると，遊び環境の整備は緊急の課題といえよう。

本研究は，子どもの成長発達の過程において重要な役割を担う「遊び環境」のあり方を模索し，特に都市に居住する子どもの遊び実態と，それに対する保護者の評価を明らかにすることにより，公園等の再整備計画においてハード面での整備に加え，ソフト面でのアプローチへの指針を得ることを目的としている。本稿では幼児期における子どもの遊び環境の実態を保護者の意識調査を基に報告する。

２．調査概要及び調査対象者の概要

⑴　調査の概要

都市に居住する子どもたちの遊び環境の実態と問題を把握するために，幼児期の保護者を対象に降園後の遊びに関するアンケート調査を実施した。調査対象者は，都心部の立地であること，降園後の自由な時間があること，等を考慮してＣ幼稚園の園児の保護者を選定した。アンケート用紙留置自記法により，全園児の保護者255名に配布し，きょうだい児については長子について記述してもらうものとし，185名の回答を得た。調査の概要については表１に示す通りである。

表１　調査の概要

調査方法	調査用紙留置き自記法
調査期間	2006年７月７日～７月14日
調査対象者	Ｃ幼稚園全園児の保護者
配布数	255部配布（年少71部　年中95部　年長89部）
回収数	185部回収（年少43部　年中74部　年長68部）
回収率	72.5%

（※きょうだい児については、長子について記述してもらうものとした。）

⑵　調査対象者の概要

表２　Ｃ幼稚園の概要

立地条件	福岡市中央区　都心部より徒歩20分圏内に立地
対象園児	年少児71人・年中児95人・年長児89人
保育時間	午前9：00～午後14：00 （バスの送迎等により後ろに１時間の幅あり）

Ｃ幼稚園は福岡市の都心部徒歩20分圏内に立地しながらも，裏山など豊かな自然を有し，子どもの自発的な遊びに力点を置いた保育・教育を行っている。福岡市中央区を中心に255名の園児が徒歩や保護者の自家用車，送迎バスを利用して通園しており，園児の居住地域は比較的広範囲に渡っている。また，その教育方針から保護者の「子どもの遊び環境」に対する関心は高いものと推察される。Ｃ幼稚園の概要は表２に示す通りである。

調査対象者の子どもの年齢，きょうだい数，家族形態，住宅形式など基本属性は表３に示す。調査対象者の８割が集合住宅居住の核家族，きょうだい数２人以下という家族像が浮かび上がる。

表３　調査対象者の基本属性

		人数（人）	割合
年齢	年少児	43	23.2%
	年中児	74	40.0%
	年長児	68	36.8%
	総計	185	100.0%
家族形式	核家族	165	89.7%
	拡大家族	17	9.2%
	その他	2	1.1%
	総計	184	100.0%
きょうだい数	ひとりっこ	44	23.9%
	２人	101	54.9%
	３人	30	16.3%
	４人	9	4.9%
	総計	184	100.0%
住宅形式	一戸建て	30	16.2%
	集合住宅	155	83.8%
	総計	185	100.0%

３．子どもの遊び環境

⑴　子どもの遊び環境の実態

①子どもの遊びの実態

子どもの遊び環境の実態として，まず子どもの遊びそのものを見てみる。子どもが外で遊ばなくなった，あるいは遊べなくなったと言われるようになって久しいが，子どもの外遊びへの関心度はどうだろうか。子どもの外遊びの関心度について，保護者に「とても好き」から「きらい」までの5段階で評価してもらった。外遊びが「とても好き」が最も多く全体の6割強であり，「好き」(24.9%) と合わせると外遊びが好きな子どもは約9割を占め，子どもの外遊びへの関心の高さを示している。

しかしながら，実際に子どもたちがよくする遊びで最も多いのは，「絵本を読む」(61.6%) である。次いで「お絵かき」(55.1%) や「お人形・おままごと」(50.3%) であり，室内での静的遊びが多いことがわかる。続いて，「公園の遊具」(45.9%) や「乗り物遊び」(45.4%)，「砂場遊び」(40.0%) となっており，子どもたちの遊びが屋外型より室内型であることが明らかである。

表４　外遊びの関心度

	人数（人）	割　　合
とても好き	120	65.6%
好　　き	46	25.1%
ふ　つ　う	16	8.7%
あまり好きではない	1	0.5%
き　ら　い	0	0.0%
計	183	100.0%

表５　よくする遊び（複数回答）

	人数（人）	割　　合
絵本を読む	114	61.6%
お絵かき	102	55.1%
お人形・おままごと	93	50.3%
公園の遊具	85	45.9%
乗り物遊び (三輪車)	84	45.4%
砂場遊び	74	40.0%
ボール遊び	64	34.6%
ミニカー等のおもちゃ	51	27.6%
おにごっこなど	29	15.7%
カード遊び	20	10.8%
テレビ・携帯ゲーム	13	7.0%
そ　の　他	32	17.3%

(N＝185)

②子どもの遊び時間

ｉ）おけいこごと

子どもの遊び時間の実態を把握するために，幼稚園降園後の時間の使い方の中で，遊ぶ時間に最も影響を与えると思われる「おけいこごと」についてみてみる。表6に示すように，おけいこごとをしている子どもは多く，全体の約75%を占めている。また，そのおけいこごとの種類は１種類，２種類が多いものの，３種類以上のおけいこごとをしている子どもも約３割いる。また，年齢が進むにつれおけいこごとの種類も増えていることがわかる。

表６　おけいこごとの有無と数　(N＝185)

	1種類		2種類		3種類		4種類		5種類		している(計)		していない	
	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
年少児	11	64.7%	6	35.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	17	39.5%	26	60.5%
年中児	31	54.4%	17	29.8%	5	8.8%	4	7.0%	0	0.0%	57	77.0%	17	23.0%
年長児	19	29.7%	33	51.6%	10	15.6%	1	1.6%	1	1.6%	64	94.1%	4	5.9%
計	61	44.2%	56	40.6%	15	10.9%	5	3.6%	1	0.7%	138	74.6%	47	25.4%

また，おけいこごとの内容をみると，最も多いのが「スイミング」(34.6%)，次いで，「音楽教室」(24.3%)，「英会話教室」(19.5%)，「お勉強教室」(14.1%)，「バレエ」(12.4%)，「遊び教室」(6.5%)，「ダンス」(0.5%) の順である。おけいこごとの多さが，子どもの遊び時間を減少させる一因となっていることが推察される一方，「遊び教室」というおけいこごとに代表されるように，体を使った遊びに代わるものとして，あるいは十分にできない外遊びを補足するものとしておけいこごとが位置づけられているとも考えられる。

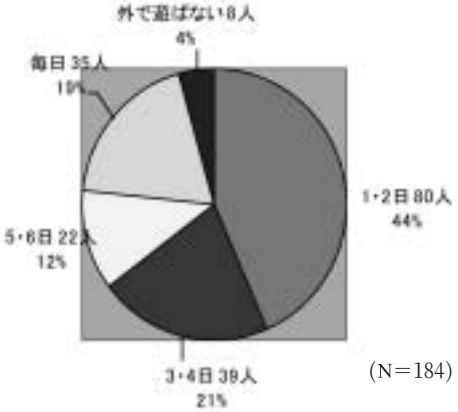
表７　おけいこごとの内容（複数回答）

	人数（人）	割合
スイミング	64	34.6%
音楽教室	45	24.3%
英会話	36	19.5%
お勉強教室	26	14.1%
バレエ	23	12.4%
遊び教室	12	6.5%
ダンス	1	0.5%
その他	36	19.5%

(N＝185)

ⅱ）外遊びの頻度

子どもの外遊びの頻度について，一週間にどのくらいの日数遊ぶかを聞いたところ，「週に１・２日」(43.5%) が最も多く，次いで「週に３・４日」(21.2%)，「毎日」(19.0%) の順であった。また，「外で遊ばない」子どもが８人 (4.3%) おり，前項の子どもがよくする遊びの内容からも，遊びの室内型化が明らかであったように，外遊びの減少は顕著である。



(N＝184)

図１．外遊びの頻度

③遊び空間

降園後の子どもたちの遊び場としては，「自分の家」(93.0%) が圧倒的に多い。また，屋外の遊び場として「近所の公園」が最も多い (35.7%) ものの，「団地・マンションのまわり」(18.4%) や「路地や道路」(4.3%) など，親の目の届く比較的狭い生活圏にあり，本来子どもの遊び場として計画されていない空間を遊び場として利用している。また，年齢による大きな違いはなく，幼児期の子どもの行動範囲・生活圏の狭さを垣間見ると同時に，屋外でよく遊ぶ子どもの割合は半数にも満たず，遊びの室内化がうかがえる。

表８　降園後子どもがよく遊ぶ場所（複数回答）

	年少児		年中児		年長児		計	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
自宅	39	92.9%	69	93.2%	64	94.1%	172	93.0%
近所の公園	15	35.7%	23	31.1%	28	41.2%	66	35.7%
友だちの家	6	14.3%	24	32.4%	13	19.1%	43	23.2%
団地・マンションまわり	12	28.6%	10	13.5%	12	17.6%	34	18.4%
幼稚園の運動場	6	14.3%	8	10.8%	6	8.8%	20	10.8%
ちょっと遠いけどお気に入りの公園	8	19.0%	6	8.1%	3	4.4%	17	9.2%
路地や道路	3	7.1%	4	5.4%	1	1.5%	8	4.3%
児童館	1	2.4%	1	1.4%	4	5.9%	6	3.2%
空き地	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.5%
その他	5	11.9%	6	8.1%	10	14.7%	21	11.4%
	(N＝42)		(N＝74)		(N＝68)		(N＝185)	

④遊び仲間

降園後の子どもの遊び相手は「きょうだい」(68.1%) が最も多く，次いで「母親」(66.5%)，「同年齢の友だち」(49.7%)，「父親」(35.7%) の順であり，遊び相手が家族を中心に狭い範囲に留まっている。また，約半数の子どもたちの遊び相手は「同年齢の友だち」であり，遊び仲間の異年齢集団への広がりは少なく，さらに，一人で遊んでいる子どもも少なからずいる (22.2%)ことがわかる。

表９　子どもと一緒によく遊ぶ相手（複数回答）

	人数（人）	割合
きょうだい	126	68.1%
母親	123	66.5%
同年齢の友だち	92	49.7%
父親	66	35.7%
祖父母・親戚	42	22.7%
一人で	41	22.2%
異年齢の友だち	39	21.1%
その他	5	2.7%

(N＝185)

また，年齢別に子どもの遊び相手を見てみると，表10に示す通り，年少児の遊び相手が圧倒的に「母親」が多いのは当然のことながら，年齢が高くなっても遊び仲間が異年齢集団へとは広がっておらず，地域の子どものコミュニティへと生活が繋がっていない，あるいは地域の子どもの異年齢コミュニティそのものの存在の希薄さがうかがえる。

表10　年齢別に見る子どもの遊び相手

年齢	１位	２位	３位
年少児	母親 38人（88%）	同年齢の友だち 37人（56%）	父親 22人（51%）
年中児	きょうだい 56人（76%）	母親 40人（54%）	同年齢の友だち 37人（50%）
年長児	きょうだい 49人（72%）	母親 45人（66%）	同年齢の友だち 31人（46%）

(N＝185)

⑵　子どもの遊び環境に対する保護者の意識

①子どもの遊び環境に対する不満・不安

保護者に子どもの遊び場に対する満足度を５段階で評価してもらった（図３）。遊び場に対して「少し不満・不安」に思っている保護者が76人（42.2%）と最も多く，次いで「とても不満・不安」が50人（27.8%）である。一方，「とても満足」「少し満足」と答えた保護者は，それぞれ８人（4.4%），13人（7.2%）と１割に満たず，ほとんどの親が何らかの不満・不安を抱えていることがわかる。

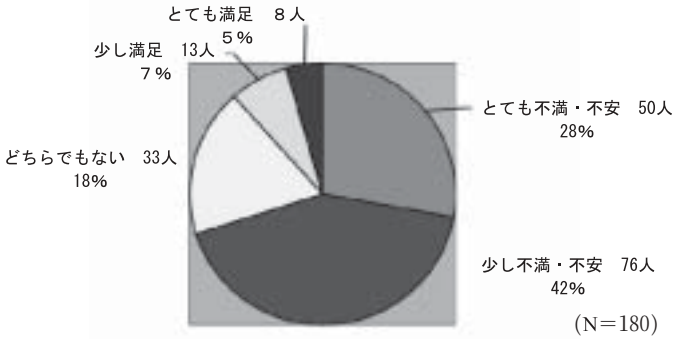


図２　遊び場に対する満足度

②子どもの遊び環境に対する保護者の評価

子どもの遊び環境に対して保護者がどのように感じているかを17項目から選択してもらった(複数回答可)。その内容を見てみると，「事件にまき込まれないか心配」(49.2%) と「雨の日遊ぶ場所がない」(49.2%) が最も多く，次いで「自然が多い遊び場がない」(41.6%)，「砂場が汚い」(33.5%)，「交通事故などが心配」(30.8%)，「近所に適当な公園がない」(30.3%)，「不審者がいる」(25.9%) であり，特に突出した項目があるわけではなく，子どもの遊び環境に対する保護者の不安や不満は様々である。

また，「子どもの遊び環境について思うこと」を自由記入方式で質問したところ，様々な意見や感想がたくさん書かれており，高い

表11　遊び環境についての感想（複数回答）

	人数（人）	割合
雨の日遊ぶ場所がない	91	49.2%
事件に巻き込まれないか心配	91	49.2%
自然が多い遊び場がない	77	41.6%
砂場が汚い	62	33.5%
交通事故などが心配	57	30.8%
近所に適当な公園がない	56	30.3%
不審者がいる	48	25.9%
遊び場に木陰が欲しい	37	20.0%
遊ぶ友だちがいない	32	17.3%
子どもが喜ぶ遊具がない	28	15.1%
遊び場が狭い	25	13.5%
プレイリーダー等の配置が欲しい	24	13.0%
整備されていない	23	12.4%
遊び場に死角が多い	21	11.4%
親同士の交流する場がない	6	3.2%
中高生のたまり場になっている	5	2.7%
その他	9	4.9%

(N＝185)

関心と大きな不安・不満を見出すことができる。その自由記入内容を子どもの遊び時間・空間・仲間に関するものに分類し，いくつか抽出してみると，以下のような内容があげられる（原文のまま)。

●子どもの遊び時間

・習い事をしている子が多く，遊ぶ時間がない。

・夕方，親が忙しくしているため，外遊びへ連れて行けない。

●子どもの遊び空間

・住んでいるマンション等に簡単な公園や，遊びのための共有スペースがほしい。そうすれば不審者を気にせず遊ばせられる。

・今はどこの地区も広場等が無い為，マンション下の駐車場または駐輪場であそばせるしかない。

・マンションは増え子供は増える一方だがまったく近くに公園や安心して遊べる空き地などがない。

・マンション住まいということもあり，近所に公園が無いため，公園までとても交通量の多い危険な道を通らなければならない。

●子どもの遊び仲間

・異年令集団での遊びを体験してほしい。

・近所の子供たちが，年令に関係なく，近所をウロウロして，遊び回るのがいいと思う。

・近所の公園に行っても，子供が遊んでいない。

・つれていけば公園に誰かが遊んでいるといいと思う。

・子供をターゲットにした事件が多いために昔のように自由には子供同士では遊びに出せない 。

これらに加えて，子どもの遊び内容についても以下に抽出した意見があり（原文のまま)，都市に住む子どもたちの遊びに自然の豊かさを求める声や，整備された空間を望む声はもちろんのこと，それに加えて遊びの助っ人的な人的支援への要求を見出すことができる。

●子どもの遊び内容

・幼稚園児でも参加できるボーイスカウト，ガールスカウトがあればいいなと思う。

・自然のこと（木や花・虫の名前）を教えてくれるガイドさんがついて遊びも教えてくれる企画があれば参加したい。

・ボール遊びや遊具遊び（てつ棒）など遊びながら指導してくれる人がいると助かる。

・親の目が届かないこともあり，遊びに制限も多い。仕方がない事，と親は諦め，子には我慢させているが，無茶な遊びをさせてみたいとも思う。

・季節の花や虫と触れ合ったり，泥んこ遊びに夢中になったりしてほしい。

・木登りをしたり，草花を取ったりして遊ばせてみたい。

・自然の中で，色々なことを感じて欲しい。

・四季を感じることの出来る生活が最も望ましいと思う。

・五感を使って思う存分遊ばせてあげたい。

４．子育て環境について

⑴　子育て環境の実態

①外遊びへの保護者の付き添い

子どもの外遊びへの付き添いの実態を見てみると，「付き添う」保護者が175人（94.6%），「付き添わない」保護者が8人（4.3%）である。年齢が上がるにつれて子どもの外遊びに付き添わない保護者の割合は若干増加するものの，年長児の９割の保護者が外遊びに付き添っている。また，その付き添う理由として「子ども一人で外へ行かせるのは心配」（81.1%）が最も多く全体の８割を占める。

表12　子どもの外遊びへの付き添い

	年少児		年中児		年長児		計	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
付き添う	42	100.0%	72	97.3%	61	91.0%	175	94.6%
付き添わない	0	0.0%	2	2.7%	6	9.0%	8	4.3%
	N=42		N=74		N=67		N=183	

表13　子どもの外遊びに付き添う理由

	年少児		年中児		年長児		計	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
一人では遊びに行けないから	10	23.8%	10	13.7%	4	6.3%	24	13.5%
子どもが一緒に来てほしいと言うから	0	0.0%	0	0.0%	3	4.8%	3	1.7%
子ども一人で外に行かせるのは心配	32	76.2%	62	84.9%	56	88.9%	150	84.3%
自分も外へ出たい	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%	1	0.6%
計	42	100.0%	73	100.0%	63	100.0%	178	100.0%

②子育ての悩みや気がかり

子育てについての悩みや気がかりについて聞いたところ，「ほめ方・しかり方」(60.5%) が最も多く，過半数を占めている。次いで「友だちとの関わり」や (37.7%)，「食事のとり方」(28.6%)，「ケガや病気」(25.9%)，「挨拶の習慣」(13.5%)，「テレビの見方」(13.0%)，「遊んだ場所の片付け」(10.8%)，「習い事の選び方」(9.7%)，「子どもとの遊び方」(9.7%)，「幼稚園の中での生活」(9.2%) であった。幼児期における子どもの基本的な生活習慣に関するしつけ等にかかわる悩みや気がかりよりも，子育てにおける親自身の在り方についての悩みや気がかりが圧倒的に多いことが分かる。

表14　子育ての悩みや気がかり (複数回答)

	人数(人)	割合
ほめ方、しかり方	112	60.5%
友だちとの関わり	69	37.3%
食事のとり方	53	28.6%
ケガや病気	48	25.9%
挨拶の習慣	25	13.5%
テレビの見方	24	13.0%
習い事の選び方	22	11.9%
遊んだ場所の片付け	20	10.8%
子どもとの遊び方	18	9.7%
幼稚園の中での生活	17	9.2%
その他	6	3.2%

(N＝185)

③子育ての援助

子育てに困ったときに手助けをしてくれる人は，「配偶者」(69.7%) が最も多く，次いで「自分の親」(58.9%)，「子どもの友だちのママ」(37.8%)，「配偶者の親」(23.2%)，「近所の友人・知人」(22.2%) の順である。ほとんどが親族や友人といった自分の交友関係の中で何とかやりくりしており，中でもママ友だちが子育て期の母にとって大きな支えとなっていることが明らかである。一方，「ファミリーサポート[注4)]」(2.7%) や「託児施設」(8.1%) を利用するなど公的なものや民間のサポート機関を上手に利用している一面もうかがえる。しかしながら，近所ではない友人・知人を頼ったり (4.9%)，手助けをしてくれる人が「いない」との回答も少数ながらあり (4.3%)，孤独感に陥りやすい子育ての現状を垣間見ることができる。

表15　子育ての援助 (複数回答)

	人数(人)	割合
配偶者	129	69.7%
自分の親	109	58.9%
子どものともだちのママ	70	37.8%
配偶者の親	43	23.2%
近所の友人・知人	41	22.2%
親戚	17	9.2%
託児施設などの一時預かり	15	8.1%
近所ではない友人・知人	9	4.9%
いない	8	4.3%
ファミリーサポート	5	2.7%
その他	7	3.8%

(N＝185)

5．まとめ

都市に居住する子どもの遊び環境は，遊びの内容の貧困化，時間・空間・仲間の減少という様々な問題を抱え，特に幼児期の子どもにとって，その遊び環境の悪化は看過できないものである。そ

れが例えば，子どもの外遊びの付き添いや，おけいこごとによる遊びの補足という形であらわれており，子育てへの負担となっている。このことが結果的に子育て環境を悪化させ，ひいては子どもの自由な屋外遊び時間を減少させ，心ならずも親の過干渉・過保護によって子どもの自立を阻害し，さらに子どもの遊び環境を悪化させるという悪循環を引き起こしているように思われてならない。

このような現状で，子どもの遊び環境整備が，施設整備中心のハード面での整備だけでは困難であることが明らかであることは，先にも述べた通りである。近年の幼児遊園や街区公園[注5)]の再整備計画策定にあたって，地域住民を巻き込んでのワークショップ手法が多用されるのは，単に住民の意向を計画に反映させるという目的だけではなく，再整備後の管理・運営に地域コミュニティの力を期待してのものである。加えて，その公園が地域住民にとって地域の公園として確たる位置づけがなされた後には，その公園が地域コミュニティの核としての役割を果たし，公園が人を集める媒体となって，更にコミュニティの醸成に寄与することを期待するのである。このことを考えると，公園及び公園周辺の道路環境まで含めたハード面での整備に加えて，コミュニティづくりのきっかけとしての人的支援等，ソフト面での施策が大きく求められていると言えよう。

福岡市における小学校の「放課後の遊び場づくり事業」においては，「見守りサポーター」とは別に「プレイリーダー」を子どもの遊びや活動のきっかけづくりや仲間づくりを支援する目的で適宜派遣するという一種先進的な試みを行っている。同様の試みが地域の公園でなされるなら，「安心して遊ばせる公園がない」もしくは「公園で遊んでいる子どもがいない」という状況を少しでも改善できるであろうし，また，かつては自然発生的に形成されていた地域の中での子どもの遊び集団を，意図的に作り出す方策のひとつとしての可能性を秘めていると思われる。

[補注]

注１）中央教育審議会『子どもの体力向上のための総合的な方策について』　中央教育審議会　2002

注２）2002年度，文部科学省生涯学習政策局は「子ども放課後・週末活動支援事業」の新規事業を推進しており，地域と家庭の子育て支援事業が喫緊の課題としている。

注３）安恒万記　『都心における子どもの遊び環境について　――「放課後の遊び場作り事業」事例――』筑紫女学園短期大学紀要　2005

注４）ファミリーサポートセンターとは，子育てを応援したい人と，子育てを応援してもらいたい人とで作られている会員組織のことで，地方の行政が，市民と連携をとって行う，労働省の子育て支援事業の中の一つである。活動内容は様々であるが，「保育園・幼稚園の迎え及び帰宅後の預かり」や「学童保育の迎え及び帰宅後の預かり」など，帰宅後の預かりが多くを占めている。

平成20年２月現在の福岡ファミリーサポートセンター会員数は，依頼会員が3,113人，提供会員が675人，であり，依頼会員に比べて提供会員の少なさが明らかである。

表　福岡ファミリーサポートセンター会員数（平成20年度２月現在）

子育てを応援してもらいたい人（依頼会員）	3113人
子育てを応援したい人（提供会員）	675人
子育てを応援してもらいたいし、応援もしたい人	568人

（資料：福岡市社会福祉協議会）

注５）都市計画法では住区基幹公園は日常的な利用を目的としており，誘致距離や面積によって「街区公園」「近隣公園」「地区公園」の３つに分類される。この「街区公園」は誘致距離250m の範囲を目安に計画され，幼児の遊びを目的とした公園である「幼児遊園」と合わせて子どもの遊び場としての利用が想定される。

[参考文献]

・仙田満『子どもと遊び』　岩波書店　1992
・住田正樹・高島秀樹編『子どもの発達と現代社会』　北樹出版，2002
・ロビン・ムーア他編著 吉田鐵・中瀬勲共訳『子どものための遊び環境 計画・デザイン・運営管理のための全ガイドライン』　鹿島出版会　1995
・こどもとまちづくり研究会編著『こどもとまちづくり　面白さの冒険』　風土社　1996
・住田正樹『子どもの仲間集団の研究』　九州大学出版会　1995

(やすつね　まき：人間福祉学科　准教授)